

ハンガリー動乱50年:動乱を招いた暗黒時代(その3) —ライク・ラースロー処刑事件

盛田 常夫

ライク・ラースローは1949年5月30日の逮捕の瞬間まで、自らが肅正の標的になっていることを知らなかった。その前日には、バラトンリガで静養するラーコシを夫婦で訪ね、帰り際にはラーコシが「今度は、息子を見に行くからな」と声をかけてもらったばかりだった。長男（ライク・ラースロー・ジュニア、SZDSZ創設者の1人）が生まれてまだ5ヶ月も経っていなかった。しかし、ラーコシはすでにこの1週間前にライク逮捕に向けた筋書きを練り上げていたのだ。

ライク逮捕の経緯

5月11日に拉致されたフィールドの「自白」によって、スーニィ・ティボールが逮捕されたのは18日。そのスーニィは、23日に決定的な「自白」を強要された。「スイスにおいてアメリカのスパイ、フィールドとコンタクトをもった」、と。ラーコシは「スーニィの逮捕で終わらせるな、黒幕を暴き出せ」とハッパをかけた。ピーテル・ガーボル等ÁVH幹部はライクに狙いを定め、フィールド尋問でライクの写真を紛れ込ませた多数の顔写真を与え、知っている人物を挙げさせた。拷問を受け続けたフィールドにはもう誰でも良かった。面識のないライクの写真を見て、「見たことがある」と自白したのだ。

こうして、「スーニィとフィールドの黒幕であるライクは、中・東欧における共産党に紛れ込んだアメリカの重要スパイの1人であり、ユーゴスラビアの手先」というシナリオが完成した。

このスーニィの自白を携えて、ファルシュ・ミハイはプラハ滞在中のビェルキン（ソ連内務省中欧責任者）と打ち合わせるべく、プラハへ飛んだ。ラーコシはライク逮捕の是非について、スターリンに事前許可を求めているはずであるが、中・東欧における共産党内のスパイ摘発の総元締めビェルキンと密接に連絡をとり、

それぞれの国における「敵」の摘発を連動させる必要があったと考えられる。

ビェルキンの了解をとったファルカシュはブダペストに戻り、ピーテル・ガーボルとともにフェリヘジ空港からバラトンリガのラーコシの許へと急いだ。この報告を受け、ラーコシはゲルー、カーダール、レーヴァイに招集をかけた。この会合は5月29日夜あるいは5月30日の早朝に行われたと言われる。

この会合において、ラーコシはライク逮捕の決断を伝えた。当初、レーヴァイが保留の態度を示したとも言われている（レーヴァイはモスクワ療養中に、ライクの容疑について疑問を呈しており、この時の留保がラーコシ会談時の留保と混同された可能性もある。レーヴァイがこの会合に参加したというのは、ファルカシュ・ヴラジミールの推測である）。カーダールも躊躇したと伝えられているが、スターリンの了解を得たシナリオを変えることはできない。

説得されたカーダールは、逮捕の手順を問うラーコシにたいして、積極的に「チェスゲームに誘い、そこで逮捕する」というアイデアを出した。「30日午前党本部の会合に招集し、午後サバッチャグヘジの党保養所でチェスを約束させる。それが終わったら帰宅の途につくから、そこで逮捕すれば良い」、と。これは後にカーダールが自慢げに、党学校の講義で何度も披露した手柄話として知られている。これに加え、ラーコシは赤子を抱えるライクの妻ユーリアも逮捕することに決めた。そして、すべてはこの筋書き通りに運ばれた。

ライク尋問

当時、ラーコシの私邸はXII区のローラント通りであった。オルヴァン・テールからイシュテンヘジ通りを800mほど上った左手ある狭い通り

で、そこに入ってほどなく左手にある邸宅だ。ローラント通りからイシュテンヘジ通りを1kmほど上ると、登山電車の踏切にぶつかるが、そこからエトヴォシュ通りが始まる。この道沿いにあるÁVHの秘密の館でフィールドの尋問が行われていたが、ライクもそこへ連行された。

ライクはフィールドを知らないし、スーニイが「アメリカとユーゴスラビアのスパイ」であることなど信じるはずがなかった。ライク尋問から何の証言も得られなかった。そこでピーテル・ガーボルは拷問の指示を出した。取調官が平手打ちを食わせるのは日常茶飯事だったが、それ以上の拷問には別の専門グループが対応した。後にÁVH幹部を拷問死させることになるプリンツ・ジュラ率いる一団がそれで、殺さぬ程度に拷問を加えることが彼らの仕事であった。しかし、激しい拷問が加えられたにもかかわらず、ライクは強要された「自白」を拒否した。

ここでいったん拷問が中止され、今度は48時間連続で取り調べるという方法がとられた。ÁVHからは取調官が総動員され、2～3時間ごとに取調官が交代し、ライクに睡眠時間を与えることなく「自白」が強要された。そして、その最後の取調官として、カーダールが対応することになった。

声を上げる他の取調官と違い、カーダールは静かな口調で、「自らの罪を認め、党に実害を与えたと告白すべきだ。私はラーコシと全党を代表して君と話している。率直に告白することで、救われることもあるのだ」、と。要するに、「共産主義運動に犠牲者（生け贄）が必要だ」と伝えたのだ。これが転機となってライクは自らの運命を悟り、ラーコシの筋書き通りに「自白」したとされる。

この間、他の政治局員は事の進行をほとんど知らされなかった。6月25日、スポーツ体育館で開催されたブダペスト活動者会議において、カーダールが総括報告を行い、大会は「ライクに死刑判決を！」の決議案を採択した。まさに共産主義ファシズムそのものであった。そこに出席した政治局員で、事の真相を知っているの

は、カーダールただ1人であった。後に権力の座に就いたカーダールにとって、ラーコシに従った事件とはいえ、ライク処刑は言い訳できない汚点だった。ライクとナジの処刑はカーダールが直接に関与した政治的殺人であり、カーダールが死の直前に妄想に襲われた怨念の正体である。カーダールは自らその真相を語ることなく、墓場まで真実と怨念を引きずっていった。

ビェルキンの登場

フィールド、スーニイ、ライクの調書はロシア語に翻訳され、ビェルキンに届けられた。矛盾に満ちた「自白」調書を読み、ソ連側は不安を覚えたようだ。7月初めに、ビェルキンが直々にÁVHを訪れ、拷問による自白強要手法を厳しく批判した。もっとも、最後の手段として、暴力は許されると付け加えることも忘れなかったようだが。

こうして自白の一貫性を得るために、彼とその部下がÁVHの指導者とペアになって、再尋問を行うことになった。一部はアンドラーシ通りの本部で行われたが、主要な尋問はエトヴォシュ通りの秘密の館で行われた。この尋問におけるロシア側のやり取りは筆記も録音もされず、記録に残されなかった。

ビェルキンがブダペスト滞在中は、週に2～3度、ラーコシの許に足を運んでいたとされる。ラーコシはスターリンとのホットラインで結ばれており、スターリンの意向を確認しながら、ビェルキンと詳細を打ち合わせていたと考えられる。

ビェルキンはこうやって、チェコやポーランド、あるいはブルガリアやルーマニアの粛正人事にかかわっていた。こうしたロシア側の直接関与の証拠が残らないように、尋問記録は残されなかったのだ。

ライクが狙われた理由

何故、ライクがスターリン主義の「生け贄」にならなければならなかったのか。ライクが党内に敵を持っていたことは事実だった。

1946年3月に内務大臣に就任した折、ライクはピーテル・ガーボル率いるÁVOを内務省管轄下におき、自らの手で掌握しようとしてÁVOの指導者たちと軋轢を生んだ。個人的にもライクは粗野なピーテル・ガーボルを好まず、その更迭を考えていた。しかし、ラーコシの盟友を更迭する訳にいかず、指導者以下のメンバーの交代を行うことしかできなかった。ÁVO幹部とライクの関係が好転することなく、1948年8月にライクが外相に転じて、カーダールが内相に就任した時には、ÁVO幹部たちは祝杯を挙げたと言われる。なかでも、ピーテル・ガーボルの直属の部下でÁVH副長官のスーチ・エルヌー（モスクワ亡命組）は、マニアクに西側亡命組や国内残留組の戦中履歴を洗っていた。終戦直前、スペイン内戦での義勇軍から戻ったライクは矢十字党に捕らえられるが、矢十字党幹部だった実兄ライク・エンドレの介入で解放された経緯があり、「モスクワ亡命組」が疑念を挟む口実はあった。

党指導部の序列から見ると、モスクワ帰りのユダヤ人の「4人組」は政治局でも別格であり、重要事項はすべて彼らの先決事項であった。

「4人組」の役割も明確であり、トップにラーコシがいて、その両脇に経済担当のゲルー、イデオロギー担当のレーヴァイが控え、もう1人のファルカシュはラーコシの手足として、内政・党内問題に専念していた。これら脇役のうち、ポスト・ラーコシの一番手は内政担当のファルカシュで、彼の最大の強敵がライクであった。

同じことはカーダールについても言える。ライクとカーダールはともに国内残留組であるが、人望や外見からライクが常に一步リードしていた。決定的な場面になって、カーダールがライク肅正に傾いたと考えるのが自然である。

ラーコシはどうか。ラーコシは一時期、後継者としてライクを考えていたこともあると言われる。しかし、冷戦勃発によるラーコシ独裁が強まるにつれ、逆にライクはラーコシにとって危険人物になっていった。ライクは演説がうまく、背が低く太っているラーコシとは違い、長

身で端正なマスクの美男子だった。ラーコシは常々、「長身の痩せた人物には悪者が多いというのが、古来から伝承された知恵だ」と私見を披露していた。ユーゴ問題でも、ライクはラーコシと意見の相違があったと言われる。スターリンの愛弟子として恭順の意を表すためにも、大物を差し出す必要があった。

政治局員にはライク以外に摘発する価値ある大物はいなかった。それぞれの思惑が一致して、フィールド逮捕から一挙に「ライク肅正」へ突き進んだと考えられる。

ライク裁判

いったんライク肅正を決めてから、ラーコシがすべての手順を指示するようになった。ライク裁判が始まる1949年8月末（あるいは9月初め）、ラーコシはライク告訴文書（ロシア語翻訳）を携えて、スターリンを訪問し、最終的な了解を求めた。この数日前に、ファルカシュ・ヴラジミールはこのロシア語文書をルーマニアのソ連大使館経由で、手渡しする仕事を与えられた。嵐で運行を見合わせていたMALÉV定期便を党の指示で無理やり飛ばせ、ソ連共産党中央委員でスターリンの秘書官であるポスクレビシェフ宛の文書がブカレスト空港で手渡しされた。

ライク裁判が始まる前、ラーコシは自らの執務室に2本の直通電話を引かせた。1本はビェルキンとピーテル・ガーボルへの回線であり、もう1本は検事・裁判長への回線である。裁判の様子は執務室で聴けるように準備され、ラーコシは直通回線を通して、逐一指示を出した。

この裁判が進行中、ファルカシュ・ヴラジミールはポーランドからラーコシ宛の緊急電報を受け取った。発信人はポーランド統一労働者党第一書記ビェルトである。「名代のルヴィンシュテイン（情報部員）を派遣したので、すぐに対応されたし」という内容だった。ラーコシの指示に従い、ピーテル・ガーボルとファルカシュ・ヴラジミールが空港で彼を出迎えることになった。後にピーテル・ガーボルが語ったところによれば、これはライク裁判とゴムルカ肅正

を繋げる必要性から派遣されたものだ。ラーコシがその内容を告訴状に含めることを忘れていて、これを急いで検察官に指示したが、当初のシナリオにない筋書きをどう入れるのか、担当検察官が困ったようだ。結局、ゴムルカとライクを結びつける道筋がつかず、この時点でゴムルカは逮捕を免れたのである。

ライク等の主犯の判決内容はラーコシが決めた。彼が判決内容を記した紙切れが裁判長に渡された。主要な人物の判決内容はラーコシが、それ以外の人物への判決内容はピーテル・ガーボル等のÁVH幹部が決め、ラーコシの承認を得るというのが、当時の手順であった。

死刑執行

ライク・ラースロー、スーニィ・ティボール、サライ・アンドラーシュの3名の絞首刑は、1949年10月15日に執行された。

ラーコシは裁判が終わった後、スターリンに死刑執行の許可を求めた。これにたいして、スターリンは即座に「死刑執行の必要はない」と回答電報を送ったことが確認されている。しかし、その数日後、第2電が到着し、死刑執行が容認されたという。確認されていないが、この二つの電報が往来した数日間に、ラーコシがスターリンに死刑執行の必要性を訴えたと考えるのが自然である。生かしておいてラーコシに有利になることは何もないからである。ナジ執行にたいする、カーダールの論理も同じものだっただろう。権力の普遍的な論理である。

死刑執行に際して、ÁVH幹部ならびに死刑囚の尋問に加わった取調官全員が、コンティ通り（現在のVIII区トルナイ・ラヨシュ通り）にあったÁVHの監獄に招集された。ファルカシュ・ミハーイとカーダール・ヤーノシュも立ち会った。彼らは建物内の部屋から中庭に設置された絞首台を見ることになった。絞首台までスーチ・エルヌーが、死刑囚を誘導した。

死刑執行の後、スーチがÁVH幹部たちが待つ部屋に戻り、執行の状況を報告した。死刑執行を告げた時に、ライクとスーニィは何も望まな

かったが、サライはコニャック1杯を所望しそれを煽った。執行に際して、ライクは共産党とソ連を讃えたが、スーチは何も語らなかった。しかし、サライは「俺たちを騙しやがって！」と叫んだという。

スーチの報告が終わり、集まったÁVH幹部等は簡単な飲み物とサンドウィッチでそれまでの労を互いにねぎらった。さらに、夕方にはピーテル・ガーボル主催のドナウ・クルージングがあり、ビェルキンを主賓としたソ連内務省の代表者、ÁVH幹部、取調官が参加した。ビェルキンはとくに機嫌が良かったようだ。

「祭り」の後

ライク処刑の翌月、ジュラテトゥーにて、フォルムコミンフォルムの会議が開かれた。ユーゴスラビア問題が最大のテーマで、この主報告をおこなったのは、ルーマニアのゲオロギウ・デジで、「ユーゴスラビアの殺人者とスパイの権力」と題するものだった。また、イタリア共産党トリアッティは国際労働者運動のイデオロギー的、政治的、組織的な統一性の重要性を強調する報告を行った。ハンガリーの代表団は、ラーコシ、ゲルー、レーヴァイ、カーダールで構成された。

12月にはブダペストでも、スターリン生誕70年の祝賀会がオペラハウスで盛大に挙行された。この忌まわしい1949年が終わろうとする暮れに、閣僚会議布告が発せられ、1950年1月1日より、ÁVH（国家保安局）は内務省の管轄から離れ、独立した組織として機能することが、法的に裏付けられた。ÁVH本部のあるアンドラーシュ通りは、スターリン通りに改名された。

ライク事件は処刑で終わらなかった。それはスターリン主義権力の狂気の始まりに過ぎなかった。国家や党を超えた独立権力となったÁVHは、その後の2年間に、多くの人々を拘束し虐殺することになった。「貧すれば鈍する」。やがて、ÁVH幹部相互も疑心暗鬼になり、ハンガリーは狂気と化した権力の断末魔を見るのである。（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）